たつがみ

るかめゆすゆはつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たつがみ

【Ｎコード】
Ｎ２６３６Ｈ

【作者名】
るかめゆすゆはつ

【あらすじ】
血を濃くし続けた一族に生まれた稀なる血を持つ者。特別な血は誰も経験した事のない運命をもたらす。

稀なる血（前書き）

初めて書きました。読みずらいかもしれませんが御了承ください。

稀なる血

キーンコーンカーンコーン
やっとめんどうな一日が終わり急いで家に帰る。なぜか姉に、今日だけは急いで帰るように言われた。確かに、今日は龍也の誕生日でわあるが、べつに夜までに帰ってくればいいのに、なぜ学校が終わったらすぐ帰らなけりばいけないのだろう。
「なんか昨日の姉さん迫力あったな。どうしたんだろ？」
不思議に思いながら家路を急ぐ。

「ただいまー。姉さん帰ったよ」
「おかえり、りゅう君。じゃあ急いで、誕生日の儀式しましょう」
「ぎしき…って、誕生日パーティーでしょ…」
姉のズレている言葉にため息をつきながらも、言われた通り、リビングへ行く。

龍也がリビングに入ると、久方ぶりの両親がいた。龍也の家は古い家柄でかなりの名家であり、今は二歳年上の姉と一戸建てに二人で暮らしている。両親は今どこかに住んでいるらしいがわからない。
「どうしたの、わざわざ来てくれたの？」
「そりゃあ、大切な息子の誕生日ですもの～」
「それと話がある。とても大事な事だ。１４歳の元服する時からおまえ達の将来が動き出す」
両親のわけがわからない言葉を聞くと、不思議そうな声が上がる
「おまえ……達？りゅう君の元服で？」
弟の誕生日を迎えると自分の将来までなぜ動き出すのかわからない姉は聞き返す。
不思議そうにしている娘を見ながら説明は始まった。
「龍也、おまえは今から１４年前のこの日の２２時１５分に生まれ

た」
「ママがんばったんだから」
「その日の夜、病室に誰かが訪れた。そいつはおまえを選ばれた子と呼び、きっちり１４年後迎えに来ると言っていたんだ」
「……で？」
「うちはかなりの名家だということは知っているだろ？そして代々伝わる言葉がある」
『龍を秘めし血を伝え、民を統べる能を宿す者達よ。血を重ねよ。いづれ来たる地の病とともに稀なる血を流す英雄が生まれる。』
「これが我が家に伝わる言葉だ」
「……俺がか？」
「たぶん」
「じゃあ、りゅう君が英雄で、私は？」
「あなたはりゅう君の制御役よ」
「……どうゆうこと？」
「つまり、奥さんになるのよ。ほら言い伝えにあったでしょう。『血を重ねよ』って。だからうちでは姉弟で結婚するのよ」
「じゃあ、親父達もそうなのか？」
「そうよ、お父さんが１４歳の時、私が１６歳の時から夫婦よ」
「……りゅう君と結婚、……りゅう君と夫婦、……りゅう君と……ふふふ」
「姉さん……帰ってきて」
昇天している姉を残し、誕生日の豪華な料理とケーキを食べ、穏やかな時間が流れる。

そうしているうちに２２時に針がとまる。それと同時に父親の表情が真剣なものへと変わり、何かわからないものが親父の身体から吹き出す。とてつもない圧迫感に意識を失いかけると
チュッ
「！！！」

閉じかけた目は未来の奥さんである姉の顔を見た。
「…なに…してるん…だよ」
「だって、お母さんが……」
「あら、お姉ちゃんの愛しいキスがなかったら死んでるわよ。私たち奥さん組は大丈夫だけど、抵抗力のない人はやばいわよ」
「りゅう君にキス……むふふ」
「龍、まだまだ本気はここからだぞ」
「へっ？」
あっけにとられている龍也をよそにさらに恐ろしい言葉がとんでくる。
「パパ、本気になると見境が無くなるからねぇ～。でもりゅう君とお姉ちゃんはママが守ってあげるからね」
ぼーぜんとする姉弟にかまわずそいつはやってきた。

「夜分遅くに失礼いたします。私、神の使いでやってまいりました。」
黒いタキシードに黒いシルクハットで黒いステッキを持った、神の使いと名乗る男がシルクハットを取りながら深々と頭を下げる。
「龍神様はどちらさまで？」
「この子がそうだ」
神の使いは龍也に向き直り、
「龍神様、この度はお誕生日おめでとうございます。私は神の使いでございます。龍神様をお迎えに参上いたしました」「俺が……龍神？」
「さようでございます。あなた様は１４歳になられた、今この時から龍神となられ、また一族の筆頭となられます」
「で、お前は何しに来た」
親父の怒気をはらんだ声になんでもなさそうに答える。
「私共は龍神様を神候補として認知致しました。なので、次期神様になられるための試練をお伝えしにやって来ました……」

「どうした？」
「いえ……、私が申し上げてはいけないのですが……、数十年前から神の様子がおかしいのです。後継者に求めるものは能力だけだなどと言って、今回の試練である『他の候補者を潰せ』という言葉を伝えろと……」
言いづらいようで言葉は尻つぼみになっている。さらに神の使いは神への不信感をこぼす。
「確かに、神には治安を守るためこの世でトップクラスの力がなければいけないとは思いますが、自らの過ぎる力を抑える能力も同じように必要です。神になるための条件は稀人であること。それは知っていますよね？その濃すぎる血は精神に異常をもたらし、狂う者も多くいます。そして力を抑えされない者、さらには抑えない者の中から神が選ばれると世界が荒れます。だから龍神様に神の座を掴んで頂きたいのです」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……いやっ」
皆が黙ってしまう中、小さな声が発っせられる。
「これは全ての天界人の意志でございます。いい、いや、の問題ではございません。やってもらわなければなりません。」
その声に冷たく答える声。
「やだっ！りゅう君をそんな恐いものに参加させるなんてやだっ！絶対嫌！」
「お姉様、神になる、ならないはともかく、参加はしていただく事になります。あたがたは不参加と言っていても、他の参加者は龍神様を敵と認識しております。」

「でも嫌っ！ぜった…」
「もうやめろ。龍はでなければならないんだ」
父が姉の言葉を遮るように言い聞かせる。
「龍、今聞いた通り生きたいなら強くなれ！いいな」

「試合は来年の一月一日午前零時零分開始となっています。ただ……、他の一族は神になろうと必死ですから油断はできません。本当は１４歳にならないと神武会、つまり神の選考の存在を知らせてはいけないのですが、１４歳前に伝えてしまう者が多くいます。」
「なぜ？」
「なんと言いましょうか。自らの主を神にしようとする欲が皆ありますから」
「主って？」
「私にとってあなたです」
ニヤニヤしながら実に楽しそうに言う。自分の未来がかかっているのに。
「今日から私とあなた様は一心同体です。まぁ、召し使いみたいなものでよろしくお願いします。もう決定なので意見は受け付けません」
何かいいたそうな姉弟に有無を言わせず一気に言い切る。
話が一段落して皆が頭を整理していると
「言い忘れましたが、私の事はドールとお呼びください。真名はあなた様が龍の儀式を受け、それに相応しい能力を得た時に、あなた様だけにお教え致します」
「……。いろいろと言いたい事はあるが、まぁいいか、俺の名前は龍也だ。龍神なんて偉そうな名前じゃない」
「改めてこれから宜しくお願いします、龍也様」
なんかいい感じの時に眠そうな母親から眠そうな声がでる。
「……じゃ、ねょ～。ドールちゃんは泊まっていくの～？」
「いえ、まだ仕事がありますので」

「じゃあ、明日越して来なさい」
無理矢理な言葉にさすがのドールも言葉を失う。
「りゅう君はお姉ちゃんと寝ようね」
「なんでだよ！」
「今日から夫婦だもん！夫婦の仲にはいろいろあるじゃな～い。さぁ、お姉ちゃんに身を任せなさい」
こちらも恐ろしい言葉をかけられる男が。”がんばれ！俺は押し切られたがお前だけは”そう願う父であった。

「よし、明後日山にいくぞ」
「「は～？」」
「は～じゃないだろ。お前達は明後日から夏休みだろ。だから家族みんなで山に行くんだ。だからお前達2人は明日学校で宿題終せ」
「宿題は明日でるだろ！」
「じゃ、でた瞬間終せ。準備はお父さんとお母さんに任せろ」
「でた瞬間に終すとか無理だろ。大体、夏休み初日からいくなんて…」
「いいからやれ！」
「はいっ、やらせて頂きます」
父親の何も言わせない殺気のこもった声には逆らえず、返事をしてしまう。
「やった～。お出かけだ～。家族でどっか行くなんていつ以来だろう？」
ぬけているのに学校でもトップクラスの成績をキープし続け、宿題を苦にしない姉は単純にはしゃいでいる。それに比べ、やればできるのにほどほどしかやらず頭の回転は速いが勉強の成績は平凡な弟はただただ呻く。

稀なる血（後書き）

感想やアドバイスなどを頂けたらと思います。なんでも結構なので宜しくお願いします。

お出かけ（前書き）

まだまだ上手には書けないですが、暖かい目で見てほしいです。

お出かけ

「りゅ～う君、宿題終った？お姉ちゃん兼奥さんが優しく手取り足取り教えてあげるよ～」
『やめてくれ！頼むから邪魔しないでくれ。』
「大丈夫だよ。あと少しだし」
「じゃあ、わからないとこ教えてあげる～」
『いいから一人で静かにやらせてくれ』
「大丈夫だって。宿題は自分でやらないと力にならないから自力で考えるよ」
「む～、でも～」
「ほら、集中したいから」
やっとの事で姉を部屋から追い出す。何故か昨日の話から姉は俺と一緒に居たがる。何故だ。……
まぁいい。とりあえず数学だけになった宿題をかたずけよう。
「えーと、Xの二乗イコール4だからXはプラスマイナス2と。第2問は……」
二時間後
「しゃあー、終わったー。俺ってやれば出来る子ですか」
「やったー、さすがりゅう君。ちゃんと終わったね」
「姉さん！なんでわかったの？」
「追い出されてから廊下にいた！」
なんてアホなんだ。そう思わずにはいられない龍也だったが口にはださなかった。
「じゃあ、二人とも宿題が終わった事だし、明日のお出かけの買い出ししよ！」
「あれっ？準備は親父達がするって言ってなかった？」
「お弁当ぐらい作るって言っといたの。そしたらお父さんたらね涙流しながら『幸せだー』とか叫びそうないきおいでね、それみたお

母さんが…」
『早く行って済ませようよ』たったそれだけだが姉のいきおいに言い出せず涙をこらえ話を聞きつづける。

「いやー、いい天気だ。絶好のお出かけ日和だな！」
「楽しみだね！お母さん」
「最後にお出かけしたのはりゅうが小学一年生の時だからねぇ～」
やばい、ついていけない。少しばかりの距離を感じるが両親と時間をともにする事がめったに無く、何より大好きな姉がとても楽しそうで龍也自身も楽しくなる。
「じゃあ、出発しよう！」
父親の弾んだ声をききながら龍也は前を歩く両親を変に思う。
「どっちに行くんだよ。そっちはバス停も駅もないじゃん」
「ばかやろう。バスや電車はお金がかかるし遅いだろう。時間はいくらあってもたりん」
「じゃあどうやって目的地まで行くんだよ」
「りゅう、忘れたの？私達の一族は……」
そういっているうちに人気のない山の少し開けた場所に着いた。すると親父はいつになく本気な表情を見せると目をつぶり息を整え、気を吐き出した。
「はぁーーーーーーーー」
圧迫感を感じながら親父の妖しくなっていく姿を見つめる。
角が生え、開いた口からは整った歯並びが見えるが一本一本が鋭く尖り、見開いた目の瞳は縦に伸びる。皮膚は鱗で覆われその姿は伝説でしか聞いた事のない、絵本でしか見た事のない龍になっていく。自分の父親の特異な力に不気味さにどうにかなりそうなるが、母親から声がかかる。
「そう言わないであげて。あの人だってこの力に悩んだ事があるの

よ。この力の事を私にも話してくれないでずっと悩んでたのよ。それで問いただしたら、なんでも自分が自分でなくなるような感覚がして、自分が人間じゃなく化け物に思えたらしいわよ。」
父親の意外な過去を聞いてしまい複雑な表情で父親を見ることしかできない。
「それとね、あの人はね自分がこんなんじゃ私に嫌われると思ってたらしいのよ。そんなことないのにねー、可愛いとこあるよねー」
なんだこののろけばなし。
「早く乗りなさい。少し遠くまで行くんだからな」
自分の話がされているとは知らない父親が三人を急かす。そして三人は父親の背中の翼の間の乗りやすいところに乗りこむ。
「ちょっと高くて恐いね、落ちないかなぁ～」
「あなた、安全運転で行くのよ」
「ふぅ～。龍、お前は前に乗れ。早くしろ。女性陣のご機嫌をそこなう前に飛ぶぞ」
女性陣のリクエストにため息を一つ吐き出すと、おもむろに龍也を自分の頭の上、会話が出来る所に呼ぶ。
龍也は父親の言う通りに頭に登ったと同時に羽を2、3回羽ばたかせ飛ぶ準備をして
「いくぞ」
そして真上へ風を切り裂いて飛び上がる。母と姉は目をつぶり必死で背中に掴まる。そしてほんの数秒で速度は遅くなり空中で止まる。二人は止まったのを感じ、目をゆっくりと開ける。
四人の下には雲が浮かび、流れ、ちぎれる。周りは３６０度が真っ青で下から上へと薄くなっていく。太陽がやけに近く感じる、実際に近い場所で四人は佇んでいた。
「もぅお父さん、いきなり怖いじゃない」
「あなた、安全運転でって言ったでしょう」
ブーブー……
女性陣のブーイングを見事にスルーして、龍也に父親は話し掛ける。

「お前は目をつぶらなかったな。怖くなかったか？」
「うん、スゲー気持ちよかったよ。親父が雲を引いてまるで空へ掛橋が繋かったみたいですごく幻想的で綺麗だった」
興奮が冷めない龍也は子供のように一気に感動の言葉を吐き出す。
「やっぱり、お前も一族の子供だな。あれだけ怖がるように飛んだのにな。いつか目覚めたら自分で飛べるようになる。さぁ、レディ達今度はゆっくり飛ぶから空の旅を楽しんでね」
複雑な声で呟き、その後は努めて明るく振る舞った。

「見えてきたぞ。あれが目的地だ」
そこは、雲の上に山頂が飛び出していて、一面の緑がそれを覆っていた。
その山は近ずくにつれ四人を拒むように猛々しく繁っているのが確認出来る。父親はさらに上昇し頂上付近に着くと、木々を薙ぎ倒しながら着地した。
「よーし、ここから少し歩くぞ。頑張ってついて来い」
その後、険しい山道を父親の後になんとかついていく。整っていない山道は慣れなていない二人には厳しいものであった。
しかし、空から見た時は一面が緑のように見えたが、実際に入ってみると確かに光がささないような繁りすぎているところが多いが、ちゃんと光が入り綺麗な池が湧いていたり実が成っているような木がある場所もある。
「あと、どんぐらい？いいかげん疲れた」
「めうすぐだぞ。あっ、ほらっ見えてきた。登竜滝だ。お前はここで本物の竜になる」
開けた場所にはほぼ垂直な高さ１００メートルはあろうかという滝に着いた。とても綺麗で透明度はかなり高いはずの水だが滝壺は深すぎて底が見えない。

神秘的すぎて言葉が出ない姉弟。
「いくぞ。竜の儀式だ」
父親の力強い言葉が滝に掻き消されず響く。

お出かけ（後書き）

よかったら感想やアドバイスを頂きたいです。

竜の森（前書き）

自分でも不自然さを感じます。

竜の森

「儀式……って……」
「よし、じゃあ中に入るぞ」
「いきなりっ」
「中に入れるの～？」
「滝の裏側に洞窟があって一族の血にしか進めない扉を進む」
「じゃあ私はどうすればいいのでしょうか？」
……
「「「ドール！」」」
「あら、よく間に合ったわね」
「はぁー、よく間に合ったじゃないですよ。あなたが今日は龍神様の儀式を行うから絶対に来い、死んでも来い、と言ったのではないのですか」
「でも、ドールちゃんはもともと竜の儀式には来るつもりだったでしょう？」
「それはそうです。今日が龍神様に永久の忠誠を誓う日ですから。来ないわけにはいかないのですよ」
「ふ～ん、で、どうやってドールも入るの？お父さん」「え～っとだな。たしか……」
「たしか、いまのところ正統な一族当主のあなたの血をかけてあげればいいのよ」
「そうだっけ？」
「そうよ」
正統な当主であるはずの父親ではなく、母親の方が答える。この家系の女性陣はどうやら頭がいいらしい。
「じゃ、ドール、こっちへ来い」
呼ばれたドールは父親の前に立つ。
「よし、座れ」

犬じゃないんだからと思いつつ従う。
父親は自分の親指の腹を噛み切り血を垂らす。
「お前もやれ」
父親にならい親指の腹から血を見せる。
父親はドールの周りを回りながら自分の血を振り掛けていく。三周ぐらい回り最後にドールと親指を合わせドールに問う。
「黙秘を貫けるか？」
「誓う」
「よしっ、これでいいはずだ」
「ね～、早く行こうよ～」
一族にしか行けない場所ということで楽しみでしょうがない姉は一行を急かす。
「じゃ、いくぞ。龍、先行け」
父の言葉を聞き、先頭を歩く龍也。滝に向かいまっすぐに、行き方を知っているかのように躊躇いなく歩いていく。龍也が滝に差し掛かると、滝の方が龍也を避けて流れる。真ん中が割れ、迎え入れるような滝に親しみを感じる。
「ありがと」
一言お礼を言って龍也は洞窟へ足を踏み出す。外からはそんなに深く見えなかったが、龍也が足を一歩踏み出す度に暗い闇はどこまでも伸びる。しかしどこからか細い一本の光が射していて、５分も歩いたところで光が太くなる。
龍也は自然と小走りになり、その光にたどり着くと目の前が真っ白になり何も見なくなる。目が明るさになれ、周りが見えて来るとそこには、
「なんだ、また同じ森じゃん」
洞窟へ入って来る前と同じような風景が広がっていた。
「残念。ここは表とは少し違う。よーく、見てみろ」
龍也が言われ通り、見回してみると、向こうでは見られなかった植物が生えている。それに動物も。

「どこ、ここ？そしてなんで親父達が前にいるの？」
「まぁそのうちわかる。それより早く行くぞ。約束の時間は過ぎている」
答えになっていない答え方をする父親にムッとするが、訳のわからない場所なのでしぶしぶ従う。

5分も歩いたところで一行は大樹の前にたどり着いた。強く大地に根を張り、太い幹は所々苔が着いている。それが遠い月日のなかを生きてきた証のように思うが、繁る葉は深い緑もあれば、若々しい緑もありいまだ生きた凛々しい姿を残す。天空からそそぐ太陽からの虹の光は葉に所々遮られ、大樹の神々しい後光となり聖樹を飾る。
「ただいま戻りました。マザードラゴン様」
『入れ』
中から聞こえる声に従い、中に入るとそこには、
「……」
「素敵……」
「これはこれは……」
絶句する三人に一匹の竜が優しい言葉をかける。
『よく来ましたね。龍也、零菜。それと……ドールですか。』
一匹の真っ白な竜は全てを見透かしているかのような緑の眼で見つめる。
『あなた達に会えるのをどれほど待ったことか。この時が来た事が嬉しくも、恨めしくもありますね。あんな争いに身を投じる手助けをしなくてはならないなんて』
「いろいろと聞きたい事があるのですが……」
「そんなに緊張しなくていいですよ。何が聞きたいですか？この場で答えられる事ならなんでも答えますよ」
「それじゃあ、あなたは誰なんですか？」

「私は万年竜です。永遠の時を生き、一族の中で血に目覚めた者を導く存在と言われています」
「なんでそんな曖昧な言い方なの？」
「それは私にもわからないからです」
「じゃあ、血に目覚めない人はどうなるの？」
「どうもしませんよ。秘密を知る人間として生きてもらいます。だからそうゆう者達の前には姿を見せません。実は、血に目覚めない者の方が多いんですよ」
「導くってどうゆうこと？」
「導くとは竜の力を与え、本物の龍人にするのです」
「龍人は普通の人とは違うの？」
「……」
いままで止まる事なく答えていたマザードラゴンの口が止まる。龍也はなぜ止まるのかわからず聞き直す。
「俺が龍人になったら、俺は俺でなくなるのか？」
質問の意味がわかった両親と零奈は不安げな目で龍也を見て、マザードラゴンの返事を待つ。
「……答えずらいですね。……それはわかりません。私は経験していない事なので。しかし、いままで見てきた中で龍人になった事で変わってしまった者はいます」
マザードラゴンの素直な答えに一行は息を飲む。しかし、マザーは続けた。
「たとえそのような者が居たとしてもあなたは一番良い例が身近にいますよ。ね、一（はじめ）」
そういってマザーは父親の方をみる。父親は恥ずかしそうに頬をかきながら照れ隠しに反論する。
「俺は、血が薄いからな。中に竜の力を入れても平気なんだよ」
「またまた、照れちゃってー、はじめったら」
マザーはとても穏やかな目で二人を見つめる。
「だから心配しなくても大丈夫ですよ。それでは暗くなる前に儀式

でも致しましょうか」

竜の森（後書き）

アドバイスを頂きたいです。

開花（前書き）

まだ上手く書けてません。

開花

「それでは、一、綾香、準備をしなさい」
マザードラゴンの指示に答えることもなく二人はそれぞれの準備に取り掛かる。一はまた精神統一し綾香はぶつぶつとなにか呪文見たいなものを唱え始めた。父親が竜化しおわり母親が唱え終わるとマザードラゴンは龍也にワイングラスを渡し、そこに真紅の液体を注いでいく。
「龍也、これは私の血です。あなたが生まれたときに採って置いたものです。あなたはこれを飲み龍人となります。そのときあなたの中の竜が目を覚まし意識を奪い合うでしょう。しかし負けてはいけません。あなたでなくなるかもしれません。」
龍也にその言葉が重くのしかかる。今日が龍也として最後になるかもしれない。家族と居られるのが最後になるかもしれない。そう思うと足が震えてしまう。唾を飲み、グラスを落とさないよう両手で持ち、口に運ぼうとするがグラスに口を付けるまえにまた離してしまう。龍也の呼吸が速くなっていく。
心臓の音がやけに大きく聞こえる。龍也の心臓は竜の血を受け入れようとしているかのように共鳴する。喉が渇いたと感じるようになると、龍也の体は受け入れる準備が整ったというように拒絶反応が消えた。足は震えずしっかりと地面に着き、頭もしっかりと回る。しかしその心臓だけはいまだ力強く体の隅にまで血を巡らせる。
龍也は覚悟を決めグラスに口をつけ一気にいく。喉を通り腹に血が達するのが感じられる。そこから焼けるような熱さを感じ、立っていることができず龍也はうずくまってしまう。熱さは痛みに変わり全身に広がっていく。「ゥあ……、ァァ……」
呻くしかできない。声が上手くだせず、口からもれる息は灼熱の炎のように熱く、零奈は母親の創った結界のなかに避難しなければいけなかった。

龍也の体は熱さを増し意識が薄れていく、体の力は抜けてゆっくりと前に倒れる。零奈が助けようと飛び出してくる映像を最後に龍也の目は閉じられる。

「……ん？どこ、ここ？そういや俺……そうだ、よかったー、俺のままで」
そう言いながら体を見渡す。外見はあまり変わっていないようだが……。
「起きましたか。正気のようですね、よかった」
「みんなは？」
「一と綾香、零奈は帰りました。零奈も修行しないといけないので」
「姉さんが修行！？何を！？」
「零奈のことよりあなたの心配なさい。あなたの修行時間は今日一日だけしかないんですから」
「……俺もするの？」
「もちろんですよ。知識は血に乗せて送ったので後は実戦ですね。みっちり鍛え上げますよ！」
「……やだっ」
「じゃあ、死ね」
そういってマザードラゴンは爪を振り上げ、龍也の体を引き裂こうと一気に振り下ろす。
龍也はいきなりの攻撃に後ろに飛びのくが体にかすってしまい胸から血が垂れる。
「いやぁ、あとすこしで死んでましたね。死なないよう頑張って下さいね」
そんなどこか他人行儀な言葉を吐きながら今度は長く太い尻尾で振り払おうとしてきた。攻撃範囲が広すぎて避けられないと思ったら、龍也は丸太が抜けたような窪みに飛び込み難を逃れる。頭上を通過

していく尻尾は嵐のような風を巻き起こし龍也の体を吹き飛ばす。
そのまま大木の幹に転がりながら激突する。
「うーん。その運がいつまで続くでしょうかねー？本気で頑張らないと、本当に死にますよ」マジ死ぬ。そう思うと足が震えて動けなくなってしまう。そのかわりに頭だけがやたらと回る。一秒が何十秒にも感じ、どうすれば次をかわし生きながらえるかを必死で考えた。考えると戦いの経験なんてないのにもかかわらず次々と行動が浮かび、そのなかから最適なものを選ぼうとするも結果は見えたものばかりだった。
『逃げられない！なら……』
そう考えると同時に龍也は動いた。いつの間にか震えが止まった足は驚くべき脚力を見せ、マザードラゴンの足元に一歩で潜り込む。そこから、片手で無造作にマザードラゴンの足を掴み持ち上げ、振り回し上へ投げ上げる。マザードラゴンは空中で翼を広げ、羽ばたきながらゆっくりと降りてくる。
「思ったより早かったですね。能力が開化するのはもっと時間がかかるのですよ、普通は」
どーやら龍也を殺しかねない攻撃は龍也の能力を目覚めさせるためのものだったらしい。
「まぁでも、これでちゃんと修行ができますね。じゃあいきますよ」
そう言って翼と脚力で龍也の方へ突っ込んでくる。

開花（後書き）

感想やアドバイスを頂きたいです。

成長

「うーん、なんかないかなー？」
そういっているのは龍也だ。
能力に目覚めてからマザードラゴンと修行を初めて一週間が経つ。
マザードラゴンはなんでも食事をしなくても大気から栄養を取り込んでいるらしいのだが、一応人間？人間に近い龍也はそうはいかない。ということで食べられる物を探していた。
「えっと、今日は頑張って豪華にしようかな。魚とお肉、果物も食べたいな～」
ご機嫌な様子で早速お肉を捕るべく罠を準備する。
「この前は鳥だったから、今度は猪とかがいいな」
そういって地上の生き物用の罠を作っていく。マザードラゴンに与えられたのは少し大きめのナイフ一本だけである。一通り作り罠を仕掛ける。
そして次に龍也が向かうのは数日前に見つけた果物がなっている場所だ。これからのことも考え少しずつ採っていたのだ。

龍也はこの一週間でだいぶ逞しくなった。午前と午後の修行ではもちろん、普段の生活から学び取る事はおおかった。
食べ物を確保するために考え、探し回る。探し回るためには森の中を動き回る体力が必要である。罠を作るために頭の中で設計図の作成、それをナイフで仕上げていき、補正していく創造力と考察力を養った。

「それでは、最後の修行を始めましょうか」
「あれ、今日で最後なんですか？」

「はい、もう一通り教え終わりましたから。後はあなた次第ですよ」
龍也は心の中で渾身のガッツポーズを決める。やっと厳し過ぎる修行が終わると思うと自然にでてしまう。
「それで最後は何をするの？」
「最後は実戦です。もうすぐ対戦相手が来ますよ」
……待つこと２０分……
「遅れてすいません。なかなか見つからなくて」
「……ドールと？」
「まさか、私なんて相手になりませんよ。私が探していたのはあなた様のお相手です。それで、一匹というか一人見つけましたので報告へ来ました」
「それではドール、そこへ案内なさい」
ドールは頷き、指を鳴らす。すると龍也達の足元に穴が開き、垂直に落ちていく。ほんの数秒で地面に倒れ込み、上体を起こし前を見るとそこには男が立っていた。
誰だろ？そんなことを龍也が考えていると、男はこちらに向かって来る。３０メートル程あった距離は一瞬にして無くなり、男は心臓を突き刺そうと手に持っていたナイフを前に突き出してきた。龍也はナイフが前に出てきた時には男の後ろ側に回り込み、攻撃のため自分のナイフに手を掛けるが手を離し、腕を取り地面に倒して押さえ込む。
男が一つ動作をしている間に龍也はあれだけの動作を行っている。それだけで龍也の成長が十分に伺える。
「おー、龍也様は成長しましたね。ナイフ使いのスピードを楽々越えていきますか」
「もともと、潜在能力は高かったですからね。あのくらい当然でしょう」
この人は一体誰なんだろ？男の上で龍也は考える。

場所をよく見てみると龍也達が入って来た山のようだ。そして、自分を見た瞬間に殺そうとしてきた……
「偵察？」
「正解ですよ。龍也様」
龍也が答えを導いたところでドールとマザードラゴンがやって来る。
「こいつはですねー、おっと失礼！」
ドールは男の頭を踏み付け気絶させる。
「じゃ、私はこれを捨ててきます」
そういって男を担ぎどこかへ消える。
「あまっちょろい覚悟では、いけませんよ。あなたにも、あなたが死んだら悲しむ人は沢山いるんですから」

満月が綺麗な夜は、何故か眠れない。
貴女はどうでしょうか。

明日、龍也はマザードラゴンとの修行を終え山をでる。
その前日の夜、龍也は眠れなかった。
真夜中の山は不思議な存在である。一人で歩くと辺りは森に囲まれ奥へどこまででも暗くなっていく。命の果てた後を思わせるような風景は人間の小ささか、自然の偉大さかを強く発する。
しかし、上からは自分を照らす光が差し込む。人間の一瞬の人生の輝きを現わすかのような光は偉大な自然の中に隠れそうになる自分を阻まれることなく真っ直ぐに自分を見ているようだ。草の匂いが香しい草原の大きな岩の上に寝転んで来るべき人を待った。

「気持ちの良い夜ですね。そんな所で何を考えているんですか？」
「ドールか。なんか眠れなくてな。おまえはどうしたんだ？」
「私も眠れなくてですね、ちょっとお散歩に」
「ほー、俺が起きるまで寝ずに、偶然にも俺と同じルートを偶然にもちょうど１０メートルの間隔が開いてここで俺に会ったんだな？」
「……まったく、人が悪いですねぇ。そこまで気づいておいてあんな質問をしたんですか…？」

「……人？が悪いのはおまえだろ」

龍也が冷たく言う。

「……なんの事ですか」
「おまえは何者だ？何故俺に近づいた？」

とぼけるドールに龍也は冷たく続けた。

「……どう言えばいいのでしょうか？……単刀直入に言うと私は死神です」

成長（後書き）

アドバイスなどあれば宜しくお願いします。

主従の契約（前書き）

夏休みを満喫していました。すみません

主従の契約

「死神って俺達が思っているやつか？」
「はい、それで結構ですが事実は少しだけ違います。
死神は私一人になってしまいました」

そしてドールは淋しそうに、ゆっくり話し始めた。

「昔、天界には天使と死神が共存していました。
神様は天使でも死神でもない中立な者がなりバランスが取れていました。
その頃から天使と死神が神候補に従うというシステムが出来上がっていたのですがあるときそのバランスが崩壊しかけます。
神を自分の物にしてしまった者が現れたのです。
そいつが死神を滅ぼそうとしたんです……」

「今の神様はそんな私を助けてくださいました。
戦争中は神様にかくまってもらい、神様自身が神の座に就くと助けていた子供の死神三人を、死神という事を隠し天使の中に入れてくださいました」

最後は必死に訴えるように声を荒げる。

「神様に助けて頂いた恩は生涯忘れません。
しかし、神様があんな酷い戦争をしようとするならば全力で阻止します。
たとえ命の恩人でも殺します」

激しい怒りを込めた声は龍也でさえ怯んでしまう程のものだった。

「で、なんで俺に着いてくるんだ？」
龍也は自分がある程度の力を付けたため、薄々気付いていた。
ドールの実力は自分よりも上だということが。

「簡単なことです。あなたが私より強いからです」
「馬鹿言うな！
お前は今の俺より数倍強いはずだ」
「うーん。正確には強くなるはずです。
あなたの今の強さは竜の血のおかげだけです。
あなたが自分で手に入れた力はなにひとつありません。
だから、あなたの将来に希望を見たということです。
それに……」

静かな時が流れる。
龍也はドールが話し出すのを静かに待ち、ドールは考え込んでいるように下を向き、顔色は伺えない。

「……です」

？？？？？？？

「ということです！」
「おいっ！全く聞こえてないぞ
ちゃんと聞こえるように言え！」
「いやです。
もう一回言いましたもん。
大体、何故私がそれを言う必要があるのですか？」

言葉に詰まる。
龍也はドールに敵わないため力ずくというわけにはいかない。
……となると。

「まぁいい。
ドール、ちょとこい。あそこへ行くぞ！」
「あの一番大きい岩にですか？何故？」
「岩へじゃない！岩の上へだ！」

「よいしょっと。
おおー、月があんなに近いぞ」
「本当ですね。月のクレーターまで見えそうですね」

少しの間、月に引き付けられていると、龍也はドールの方へ向き直り、真剣な目で話し出す。

「契約をしよう」
「良いんですか？
こんな怪しい奴と組んで？
覚悟が必要ですよ」
「ばかやろう。
覚悟ならこの試合に出ると決めた時からある。
しかも、二重契約だ。まずは俺からその次におまえだ」
「……本気のようですね。」
「俺はいつでも本気だよ。
じゃ、俺の方からいくぞ！」

早速、龍也は手の平の真ん中に指を突き刺し手の平に血をためる

「ドール、おまえの血を少し垂らせ」
小指の先を死神の尖った犬歯で噛み切り、龍也の手の平に垂らす。
準備が整うと龍也は一つ深く深呼吸をして唱え始めた。
「我が身に眠る竜よ、今、主が願う。血を捧げし志高き者が我等と共に歩みを進む。この者と我を竜の息吹で包み込みたまえ。」
唱え終わると龍也の手の上の血が舞い上がり、ドールの左手に肩から指の先へと絡み付いていく。
絡み付いた血は二頭の竜に変わり、左腕を動き回る。
焼けるような痛みを感じるはずだがドールは眉一つ動かさず、物珍しいように見続けている。
やがて竜は絡み合うようにして手の甲で動かなくなる。
それは、真っ赤な竜がもう一頭を見張るようだ。

「よし！俺の方はこれでいい。」
「これでいい？これは五分五分の誓いでしょう？それで本当に良かったんですか？」
「大丈夫じゃないかな？まぁ、おまえが暴れなきゃいいことだ」
ノーテンキな、と苦笑しつつ少し安心する。ドールからすれば主人を護るため力が必要になってくるのだが、その主人に反抗しないようにと、押さえ込まれると大変不都合な状況になるところだったのだ。
ふぅ、と一度息をついてからまた深く吸い込む。

「######」

ドールは理解不可能な言葉を呟く。しかし少し呟いただけで止めてしまった。

「どうした？なんで止めたんだ？」

「いえ、もう終わりましたので」

本当に少しの時間で契約を終わしたことに龍也は驚くが、それよりも竜の知識を得た龍也でさえ理解出来なかった契約をドールは知っていて尚且つ使って見せた。

ドールの能力の底はまだ見えずいかに彼が優秀かが伺い知れる。

「さっきの契約はなんだ？そして、おまえはどれだけ強いんだよ！」

「契約については秘密です。強さについては…うーん、神の使い試験一位ってとこです。

一位になって、優先であなた様を選んだんですから」

なんなんだこいつは！

実家参り（前書き）

遅くなりました、すいません。

実家参り

「ただいまー！」「りゅ～く～ん！おかえり～！」

ドアを開けた俺に向かって玄関先から3メートルぐらい跳んで抱き着いてくる。

もう慣れた事とはいえ、今回は人の目があるので少々恥ずかしい。

「姉さん！恥ずかしいからはなれてよ！」

「むふふ～、いいじゃないの～。愛情表現だよ～。

あっ、ドール！お帰りなさい！」

「またお世話になります」

今日のドールの格好は真っ黒いスーツに真っ黒なネクタイである。

タキシードなんかで街中を一歩下がって歩かれてもどこぞのお坊ちゃまになってしまうので山を降りる前に言っておいたのである。

「姉さん、ご飯ある？お腹すいたわー」

「ちゃんと作ってあるよ。じゃあ用意するから、いろいろ済ましてきなさい」

「いっただきまーす！」

「いただきます」

「どうぞ、召し上がれ！」

目の前に用意されたおいしそうなご飯に、感謝の気持ちを込めて挨拶をすると、一週間ぶりに食べるちゃんと調理された料理達を食べ

尽くしていく。
食事は30分程で終わると気になる事を聞いてみた。

「姉さんも修行してたって聞いたけど、どんな事してたの？」
「うーん、細かい事は秘密だけど…、自分の身を護るためのものだよ」
「へぇー、どんなの？」
「たぶんりゅう君の知らないものだよ。マザードラゴンに教わらずに人間が理論的に創りあげたものらしいからね。代々母親から娘にだけ伝わってきたらしいよ」
「へぇー！面白そうだな。見せてみて！」
「だ～め！後でね」
「……。まぁいいや。
で、話は変わるけど明日からどうするの？なんか予定ある？」
「ごめんね。明日からまた私だけ修行があるらしいの。でね、りゅう君にお母さんから伝言で『りゅうはお父さんと一緒に実家へ挨拶に行ってきなさい！』だって」
「へっ？実家なんて一回も行ったことないのになんで今更？」
「さぁ？まぁ、そんなわけだから明日、お父さんが迎えに来るってさ」
「わかった」

翌日

「うわー、かなり降ってるね、父さん」
「……そうだな」
「これは父さんに乗っては行けないでしょう？どうするの？」
「……あぁ、無理だな」
「で！どうするのさ！？」

「……電車だ」

心ここにあらずな父親との会話を諦め、ビニール傘ごしに雨模様の空を見ながら駅へと足を向ける。
父親の様子がおかしい。
普段とは明らかな違いがあることには気付いた龍也だったが、単なる体調が悪いとかなんとかだろうなどと軽く考えていたのが間違いだった。

「なぁ、龍也。…実家って……覚えてるもんか？」

真昼間、誰も乗っていない車両のボックス席に向かい合わせに座り相変わらずに雨空を見続ける龍也に一は呟いた。

「…覚えてる訳がないよ」

いきなり事に驚きながらも質問に答える。

「…そうか」

それだけ言うと再び一は黙ってしまった。
外は以前雨。どこまでも灰色な空は逆に龍也を引き付ける。

暗い世界は降り注ぐ哀し気な雨で満たされる。
そこに居たって満たされるはずないのに。
差し込んだ光は暗い世界に降り注いだ哀しい雨をも世界を光り輝かせるための物へと変えてしまう。
だから、その光だけは……

「覚えてる訳ないよなぁ」

再び話し出し始めた。

「お前が生まれてから一週間後に一度だけ行ったんだよ」

さっきよりもやわらかな表情で、ゆっくりと語り始めた。

「父さんと母さんの両親、お前の爺さんと婆さんはなあまりいい人じゃないんだよ。

爺さん達は俺達に期待してたんだよ。でも、結果的に力があるにも神様候補までは届かなかったから俺達には厳しくてな。

だから、俺達は爺さん達には育てられてないんだ。昔から一族の手伝いをしている家系がいるんだがそこの人達に育てられたんだ」

零奈と龍也は初耳だった。

「で、たぶんの話だが、お前達も嫌われてると思う。嫌いな俺達の子供があれほど欲しがった神候補になったんだからな。

そこで何故わざわざそんな所に行くかというと、ある物を取りに行くためだ。それはお前達に必要な物だ。

まっ、詳しい事は向こうで話す」

話しているうちに目的の駅に着いたようだ。

一と龍也はとりあえず電車を降りて駅から出ようとしたとき、一の足が止まった。

「はー、やっぱりかー。めんどくせーけど行くしかないしなー」
「なに、この人達？やばい雰囲気が漂ってるんだけど！」
そうは言うものの駅の外は田舎の駅らしくひとっこひとりいない。
「たぶん、実家の使いっぱしり」
「なんで！？」
「そーとー嫌われているらしいよ、俺ら。
つまりは、およびでないってことだろ」
「……どうするのさ」
「ここは格の違いっつーやつを見せ付けつつ、修行ということで、
……一発もくらわず通り抜ける！」

そう言った後、一は一歩踏み出す。
隠れているらしい人達はまだ動かない。
龍也は父親の無茶苦茶な言葉にため息をこぼしながら父親に続いて歩き出した。

一は実家のある山の方へと歩いて行く。
ここまでは襲ってくる様子はなくただつけてくるだけのようだ。
そして二人が山道へさしかかったところで、事態は一気に動き出した。

息を殺し、気配を絶ち後をつけて来ていた人達は一斉に飛び掛かってきた。

戦闘（前書き）

タイトルは「戦闘」ですがあまり多くないです。
そして上手く書けている自信が無いです。
温かい目で見てください。

戦闘

上からはナイフのような刃物を持った男が、左右からは上段と下段へ蹴りを決めに二人が出てきた。それを龍也はナイフは右手の人差し指と中指で白刃を掴み、上段の蹴りは左手で防ぎ、下段の蹴りは左足の裏で受ける。
気配を殺したつもりでも龍也は人数、位置をしっかりと把握していて防ぐことは難しくなかった。

「ったく。もう少し上手に出来なかったのかね。でもこれどうしよう？」

そういって一の方を見ると同じように襲われていてまだ戦闘中のようだ。
男が日本刀を持ち、逆手で突き刺すように向かっていくも、一は一歩も動かず立ったままだ。
しかし、その刀は一に当たる前に弾かれ、男の手を離れる。
男は体勢を立て直し距離をとってから今度は素手で突っ込んでいく。
まっすぐ一へと伸ばされたはずの拳だったが途中で横に流され、勢い余って地面へと倒れる。

「無駄だからやめてくれる」

男を見詰めるその顔に表情はなく、冷たい声を話す。
向けられている男は目を見開き、尋常ではない汗をだし、一の声に多量の殺気が含まれていることを表している。
一は威圧され起き上がれない男の背中を踏み付け気絶させると龍也の方へ顔をやる。

「まだ終わってなかったのか。こいつらはいいぞ、やって」

そう言ってにこやかな笑顔を見せる父親に恐怖と違和感を感じ何も言えなくなる。
目を合わせると冷たい汗が出てくるが目を離せない。実力的には勝るはずなのに自然と足が動かない。いや、後ずさり、気を抜いたら本能で逃げ出してしまいそうになる。

「ん、どうした？……。おぉ、そうか。悪かったな」

そういって、一は殺気を抑える。
龍也は圧倒的な経験の差を感じ、唇を噛む。
気を取り直し、襲ってきた男達を見ると、今だ一の殺気に当てられて立ち直れていないようだ。
手足を放しても立ち上がれずに膝をついている男達はほおっておき、父親に駆け寄る。

「今のどうやったの？」
「秘密だ。さっ、先を急ぐぞ。」

あれ以来、何も起こらず歩くこと一時間。
二人は山の前にいた。

「おい！この大きさはないだろ」

ただの山ではない。マザードラゴンの住む山のざっと三倍はある馬鹿でかいものだ。さらに…

「地図に無いぞここ！」

そう、地図には記されてない土地なのである。なんでも山と周辺の町一帯が持ち物らしいので、地図に載せない代わりに貸しているらしい。

「まぁ、いいじゃないか。それより、ここからが本番だからな。道を聞かなきゃいけないから気絶させるなよ」

「そんなん出来るわけないだろ！」

「やれ！はい、これあげる。これで後ろで腕と足をピーンと縛っちゃって！」

そういって、一は長い糸のような物の束を龍也に投げる。

投げられた束を掴み、極めて細い糸に驚きつつ強度が心配になる。

「親父、大丈夫か？これ」

「ばかやろう！俺のヒゲだぞ。切れるわけがないだろう。龍のヒゲは貴重なんだからな！あんまり使うなよ！」

確かに、束になっているのに重さを感じないくらいに軽い。束から一本を取り出してみると見えなくなるほどに細く、龍也の力で引っ張るが切れる気配も見えない。

「なるほど。これはいい物を貰った」

ぽつり、感嘆の言葉を漏らす。

「褒めてくれて嬉しいんだけど、本命さんが来たので気を引き締めてね。言っとくとさっきの雑魚とは比べものにならないから」

そう告げたそばから、龍也の後ろから一人飛び掛かってきた。

油断でも自惚れでもなく、龍也は存在に気づかなかった。
背後から小さく速く的確に首へと繰り出された拳には微塵も殺気が込められていない。
しかし、鋭すぎる一撃は風を切りそのわずかな音で龍也は反応する。
ーシュッー
微かな音を聞き分け、振り向きつつ体を捻る。拳は頬を掠め、頬に赤い線を引く。構わずに体を突っ込み、振り上げた腕の下から背後に回り込み距離をとった。頬からは血が垂れ、それが今までとはレベルが違うことを表している。
「大丈夫か？助けて欲しかったら早めに言えよ。手遅れになってからじゃ遅いから」
「誰に言ってるんだよ。こんなんじゃ、俺は死なないよ」
その言葉に男は苛立つ。そして次の攻撃に移ろうとするが体が動かない。頭はちゃんと働いていて体へと信号を送っているはずなのにピクリとも反応しない。
「親父、全員捕まえる必要はなくないか？ボスだけ捕まえようぜ」
「なるほど！それもそうだな。じゃ、女の人を捕まえろ。いいか、無傷でだぞ！一発も入れるなよ！」
「一発も入れない？」
「そうだ！一発もだぞ！後、手伝う気はないから全部一人でやれよ」
そう言うが早いか、龍也は初めて自分から仕掛けていった。敵はあまりの大人数でこれだけの実力で統率のとれた攻撃をされたらやられる可能性が出て来るからだ。
とは言っても、圧倒的な差があった。最初、２０人近くいた人数が一瞬で倒れる。
力を入れず逆に抜き、下に自然と落ち視界から外れると懐に入り、

平手打ち。軽く優しく的確に手首を返す。
すると脳が揺れ糸が切れた操り人形のように膝から崩れる。

「さて、残るはあなただけだ」

戦闘（後書き）

アドバイスなどありましたらお願いします。

百合の花（前書き）

話がなかなか進みません。すいません。

百合の花

そこら辺に倒れている男達とは離れたところに１６０?前後の女の人が立っていた。
頭一つ抜き出ている事を表しているようにその佇まいは異様だった。
気配は勿論、殺気、激情などの感情を微塵も見せず、構えるわけでもなくただ斜に立っているようだが……。
感情も読めず、あの体位からどんな動きをするかも分からず迂闊に飛び込めずにいた。

すっ……

女の動いた足が地面に着く瞬間、女の体が消えた。目でも追えない速さに龍也はうろたえ、女の姿を確認しようと周りを見ようとしたそのとき…

ドスッ……

鈍い音が聞こえると龍也の鳩尾に女の右足がめり込んでいる。
呼吸が出来ず、女が足を引き、地面へと倒れていく自分を見下ろす女を見ながら気を失った。

うぅ…
痛みによって目を覚ました龍也は最悪の気分だった。
寝かされている布団の理由を考える訳でもなく、気を失う前の闘いをぼんやりとした頭で考えていた。
何故かあの女の人は嫌な感じがしなかった。周りにいた人達は考え

る暇もなく一蹴してしまったので分からなかったが、女の人は最初襲ってきた奴らとは違い、殺す気が無い気がした。
あの時間を楽しんでいるようだった。
蹴りも軽く優しく当てるようなものだった。明らかにおかしなことばかりだが考えがまとまらなく一人でいらいらする龍也だった。

がらっ

「失礼します。あらっ、もう目が覚めましたか。お加減はいかがですか？」
襖（ふすま）が開いて女性が入って来る。綺麗な人だ。

「ん？どうしたんですか？」

可愛いらしく聞いてくる。淡い色の着物がよく似合う彼女はおそらく２０代だろう。
整えられた眉に、まつげの長いぱっちり二重。少しだけ高い鼻に、濡れているかの様に艶やかな唇。そして、うっすら化粧がされているお人形さんのような彼女に見とれていると、

「大丈夫ですか？気分が悪いですか？」
「いえっ、もう大丈夫です！」

はっ、として慌てて答える。
そしてやっと自分が知らない所にいることに気が付いた。

「すいませんが、ここはどこですか？そしてあなたは誰ですか？」
「ここは、加護家のお屋敷で私は加護家の者です。それで十分でしょう。」

「……」
「それでは、気が付いたようなのでお父さんを呼んできますね。まだ動いちゃダメですからね」
そういって部屋をでていく。

言われた通り、動かずに加護さん綺麗だったなぁなどと考えていると加護さんと一が部屋に入って来た。
「ちゃんと動かずに待ってましたか？」
「はい！」
にこやかな笑顔とともに聞いてきた加護さんにすぐに答える、龍也。デレデレが表に出過ぎだ。
「ほんとかなー？」
などとノリノリで答えている。バカップルとはこいつらを指すのだろう。
馬鹿な会話をしている二人を一が止めに入った。
「百合（ゆり）さん、もう止めて下さい。零奈がヤキモチやきますから」
彼女は加護百合と言うらしい。
「今回、綾香と零奈は連れて来てないのね」
「はい、予定より早く始めなくちゃならなくて。俺達は速いんですけどね。あいつらのは時間がかかるのでね、俺達だけで受け取りに

来ました」
「あぁ、あれね。あれは用意しとくから帰りに渡してあげるね。あと、あれも取りに来たんでしょ？」
「えぇ、もちろん」

母親と姉を知っているらしい百合さんと一の間で龍也のわからない会話が交わされて、あれが何かを聞く暇も無く会話は完結した。

「んじゃ、そうゆうことで。じゃあ私は龍也と遊んでるから挨拶してらっしゃい」
「だめ、百合さん。今日は龍也を連れてくんだから」
「えぇー、あの人の所に龍也を連れてくの？」
「いつまでも連れて行かない訳にはいかないでしょう」
「……」
「さ、行くぞ」
「あのー、質問していい？」

完全にかやのそとだった龍也は会話が途切れたのを見計らって話し出した。

「百合さんってどんな人？あれって何？あの人って誰？」
「そうだな、まとめて話すとー、百合さんは俺と綾香の母親兼姉がわりだ。俺らが本当の両親にちゃんと育てられてないのは話しただろ？そのあとはこの加護家で育ったんだ。
加護家は俺達一族を影から見守ってるんだけど、従っているってゆうことじゃなく対等な関係で見張っている。まぁ、中立な立場だ。で、お前はさっき言った、俺と綾香の本当の両親の所に連れて行く。あと、あれは秘密だ」

一気に情報を伝えられたので追っていくのがやっとだったが、なんと

かぼんやりとだが状況が掴めた。ただ…

「百合さんは父さん達の母親兼姉がわり。ってことは百合さんはよんじゅ…」

「龍也！あんだって？もう一回言ってみ」

「止めとけ！また、おんなじことになるから」

「またってことは……？あの鳩尾に入れた女の人は…！」

「あれは百合さんだ」

「エヘッ！軽く入れたのに、龍也倒れるんだもん心配しちゃった」

可愛いけど……、ムカつくな！けど、やられるので言えない。

「はー。じゃあ、じいちゃん？の所にはすぐ行くのか？」

「あぁ、今から行く。そして今夜決行して、明日一日ゆっくりしてから帰る」

「一！明日も泊まっていくの？やったー、龍也と沢山遊べるね！」

「ふぅー」

百合の花（後書き）

アドバイスなどをいたたければ幸いです。

番外編

今のところの登場人物をまとめてご紹介します。

??　龍也（たつや）　主人公　能力：龍化　年齢：１４　稀な血を持ち、神選考トーナメント？に出ることになった神候補＆龍神

??　零奈（れいな）　主人公の姉＆妻　能力：??　年齢：１６　一族の言い伝え通り龍也と夫婦になる。本人は元々そのつもりだった。

??　一（はじめ）　主人公の父親　能力：龍化　年齢：３０代　龍化はできるものの特別な存在（龍神）にはなれなかった。そのため実の父親と母親にはほとんど育てられていない。

??　綾香（あやか）　主人公の母親　能力：呪術系？　年齢：一の二つ上　一同様、父親と母親から見離された。龍也溺愛。

ドール　能力：??　年齢：??　天使によって滅ぼされた死神の生き残り。龍也と契約を交わすものの今のところ実力は龍也以上。

加護　百合（ゆり）　能力：??　年齢：綾香より少し上　一と綾香の育ての親＆姉がわり。

マザードラゴン　詳細不明

神刀（前書き）

頑張ってます。
これからもよろしくお願いします。

神刀

加護家の隣のこじんまりとした、一、綾香の実家。今二人は玄関の前にいた。

「龍也、あれって言ってたろ。あれはじじいの裏にあるやつだ。よくみとけ」

そうゆうとさっさと玄関を開けて入って行ってしまった。
挨拶もせず入り、靴を脱ぎ、廊下を進んで行く。
見た所、物がなく人気がない。小さな家でひっそり隠居しているようだ。
廊下の角を一つ曲がり部屋に入ると座布団に座り並ぶようにしている祖父と祖母が目に入った。
息子が久しぶりに帰ってきたというのに声もかけない祖父母。一もわかりきったもてなしに少しの動揺もなく、座布団もない畳に直接座った。父親にならうように斜め後ろに龍也も腰を下ろす。
龍也が腰を下ろすと祖父がちらりと龍也を見る。

「そいつが例のやつか。ふっ」

馬鹿にしたように言い放つ言葉に龍也は怒りを覚えるが顔には出さず黙っている。

「黙れ。今日は言いたい事が有って来た」
明らかに怒りをあらわにする一。
父親が怒るのを見たからか、逆に龍也の怒りは落ち着いていった。
冷静になった龍也は家に入る前に父親が言ったことを思い出していた。

（えっと、祖父ちゃんの裏か）

そこには何もない殺風景な部屋に唯一飾られているものだった。

（どうみてもあれだよなぁ？）

「首洗って待ってろ」

確認したところでちょうど、父親が罵倒しおわった所で二人は家を出て行った。

「あれが何かわかったか？」

現在深夜。二人は加護家の布団の上で今からの作戦について話していた。

「あれって、刀みたいなやつ？」

「そうだ。あれはな神刀だ」

「なんでそんなのが家にあるのさ？」

「やまたのおろち、ってやつを退治した刀だからな。あいつは竜の一種だったらしいから、だからそれ以来家は竜を司る一族になったんだ」

「へぇ～。でら神刀をとってくればいいのか？」

「まぁ、たぶんすぐ終るさ。あいつらは神刀に触れないからな」

そして加護家を出る二人。一応万が一に備え戦闘の準備は整えている。

そして、神刀の前。

「龍也、取れ」

龍也が手を伸ばし神刀に触れると…

『誰だ！』

刀から声が響く。竜の咆哮よりも重く、熱い声だ。

『また、私が必要な時代が来たか？それとも、何も知らず手にした馬鹿者か？』

「私達は貴方を必要としている。一族に濃い血を流す稀な子が生まれ育った。力を貸してはくれないだろうか？」

少しの間、神刀は反応が無い。

『ふん、確かに今までも特に濃い血だ。余程、次に撃つべき神のまね事をしているやつは強いんだろうな』

「そりゃあ、まね事じゃなく、実の神をやりに行くんだからな」

『！！。本気か？』

二人の真剣な表情から本気なのを感じると諦めたようにまた話し出す。

『正直、神には敵うかわからんぞ』

黙って父親と神刀のやり取りを聞いていた龍也が口を開いた。

「出来る出来ないじゃない。やる」

「龍也の言う通り。それに貴方は考える限り最強の刀だよ」
雰囲気の変わった龍也の成長に驚きつつも言葉を繋げる。
『また、血生臭い闘いか。まぁ、運命に任せるか』
それっきり、話さなくなった神刀を持って家を出て行くと…

「もう来る事もないだろうな」

「龍也〜！大丈夫〜〜？」
百合が龍也に飛び掛かって出迎える。実力で負ける龍也はかわすことが出来ず捕まってしまう。
「龍也は弱っちいから心配したわよ〜」
最初のおしとやかなイメージを打破する豪快なハグ。頭はがっちりホールドされ胸に押し付けられる。
「さっ、夜も遅いし寝るわよ！明日は沢山遊ぶんだから」
声が出せない龍也。つまり、反論は出来ない。
がっちり抱っこされたまま布団に連れていかれて百合の布団で並んで寝るはめになる。

「んっ……」

前回とは違い気持ちのいい目覚めのようだ。
昨日、一緒に寝た百合はもう起きている。
台所からいいにおいが漂って来るとつられるように台所へ。すると百合が朝ごはんを作っていて、隣の茶の間で一が新聞を読んで朝ごはんを待っていた。

「あっ、龍也。おはよう。よく寝てたわね。見た目より疲れてたわよらあなたの体」
寝ている間に何かされたらしい、龍也。

「良かったな、龍也。百合さんのは秘伝技使ってるから疲労がよくとれるぞ」

どうやらマッサージのようだ。確かに、数日間のハードワークで目覚めが良くなかったが今日はすこぶる体調が良さそうだ。

「さっ、ごはんできたからたべよ」

百合の作っていたごはんが出来たようなので席に座り手を合わせてからいただく。
みそ汁とごはん、それにおかずに漬け物の日本の朝食を食べ、縁側で日光を浴びながら食休み。
しばらくなかった休日にを満喫する二人。
時間はゆっくりと流れ一日が終る。

次の日……

「じゃ、一。これ、綾香と零奈に。零奈にはちゃんとやるように言っといてね」
「大丈夫だよ。二人とも頭がいいから」
「そうね。綾香はすごく良かったわね」

『は』を強調して言って、みんなの笑いを誘い和やかな出発を迎える。

二人は綾香と零奈に何かを、龍也には神刀をお土産に帰路についた。

神刀（後書き）

アドバイス、感想などありましたらぜひいただきたいです。

ねこちゃん（前書き）

すいません。いろいろと忙しく更新できませんでした。

ねこちゃん

「やっと着いた」
地図にない所からの帰宅は長すぎる道のりだった。
どうやら気を失った後に違う場所に移されていたらしい。
そこがまた秘境というにふさわしい場所で猛獣との格闘の末の帰宅だったのだ。

「なんで違う世界の生物と戦わなきゃならないんだ！」
この世界では見たことのない生き物達がそこにいた。

「二足歩行の熊とか聞いてねぇし」
龍也から永遠と出てくる不満の声。
そんな声に苦笑いながらも実家との決別ですっきりした表情を見せている一。
二人は家のドアを開くと同時に身構える。
飛び出してくる自分達の奥さんを避けるために。

……

なにも飛び出してこない。
不思議に思いながら家のリビングへ入ると、

「何、それ？」
「「猫！」」
リビングには二人と二匹。綾香、零奈、真っ白と真っ黒な猫達がい

た。

「どうしたの？」

「拾ってきた！」

白い方はうっすら汚れていて黒い方にも小さなゴミがくっついている。

黒い方はぐったりしていて元気がなく白い方は毛を逆立て牙をむいて精一杯の威嚇をしているが、やはり元気がない。

「元気がないね。ごはんは食べないの？」

「さっきからやろうとしてるんだけど食べないし、触ろうとすると怒るの」

白い猫が黒い猫を護るように前に立ちはだかる。

「うーん。少し体が汚れているけど毛並みの綺麗な猫だなあ」

そういって床に寝転がり猫と同じ目線から猫を覗き込む。

猫は戸惑っているようだがどうしていいか分からないようで威嚇し続けている。

うるうるしたみずみずしい瞳に少し汚れているがつやつやした毛並み。思わず見とれてしまい引き込まれそうな容姿にため息がでるが、

「まぁ、目の前に置いておけばいずれ食べるよ」

「でも……」

「でもじゃないでしょ。やっぱり見られてると食べづらいだろ。ほらっ、どっかいこう」

そういって二階へ上がって行った。零奈、綾香も心配ながら渋々つ

いていく。

夕方、零奈と綾香が修行で出掛けるため家の事を任された龍也は猫達がどうなったか気になり見に来ていた。

「んっ？器しかない。ちゃんと食べたっぽいな。いやー、よかった。でもどこに行ったんだろう？」

昼に猫達がいた場所には、特盛にされた器のかわりにからの器があったものの猫達がいない。

しかし汚れた猫達の歩いたところにはしっかりと足跡が付いていた。それをたどっていくと陽の当たる縁側で二匹寄り添って眠る猫達がいた。満足そうな寝顔はずっと見ていたいほど可愛いものだ。

気持ち良さそうに眠る猫をしばらく眺めた後、夕方になると半袖では肌寒さを感じる外を心配して音をたてないように窓を閉め、上の部屋から薄いタオルケットを持ってきた。

「持ってきたはいいけど、このままかけたら確実にタオルケットが汚れるな」

少し考えた結果、やっぱり洗うのが一番早いとゆう結論に達し、新たにお庭に作れるプールに空気を入れお湯を張る。その間にタオルを数枚持って来て、準備万端で猫が起きるのをまつ。

しかし待たずさて猫が目を覚ましたが、龍也とプールがあることに驚いたのか目を見開き後ろに下がり距離をとってしまう。

「どうしたの？ほら、身体を綺麗にしよう」

しかし、言葉を聞くやいなやまわれみぎをして逃げ出してしまった。

「あっ、こら！」

龍也も追いかけ出すが、ご飯を食べて睡眠もとって元気一杯の小さな猫は捕まえられなかった。

「はぁはぁ。もう、大人しくしてよ。汚れたままじゃダメだろ」

それでも、いっこうに逃げつづける猫に龍也は諦めて、

「わかったよ。ムリには入れないから気が向いたら入ってくれよ。あそこにタオルも持ってきたから入り終わったらちゃんと拭くんだよ」

それだけ言って、上に上がって行った。

バタバタ…

しばらくベットに横になって寝ていた龍也はうるさく階段を上る音で起きた。

「猫ちゃんどうなった？」

「階段は静かに上ってよ、二人とも。あと、ノックぐらいしなさい。で、猫は下の縁側で寝ているはず」

綾香と零奈が今度はバタバタと階段を下りていく。龍也もなんだかんだで気になっている猫の様子を見に下りていく。

猫が寝ていた縁側のそばには二人がにこにこしながら同じように寝転がって猫の寝顔を眺めていた。
猫達は黒い方に白い方がのしかかっている状態で寝ている。
思った通りの綺麗な毛並みはちゃんとプールに入ってからタオルで拭いた証拠だ。

「ちゃんとお風呂に入ったようだし片付けるか。ほら、姉さん手伝って！」
「にゅふふ。綺麗な毛並みね。見事に真っ黒と真っ白」
完全に魅入っているようなので龍也は一人で片付け始めた。
プールとタオルを綺麗にしてから縁側には二匹と二人が熟睡している。

「はぁ、めんどくせ」

「とりあえずは良かったけど…どうする？」
「うーん、まだ様子見にしときましょ。術も使えるしある程度は大丈夫だと思うけど、一応ね」

ねこちゃん（後書き）

御感想やアドバイスなどありましたら宜しくお願いします。

まつり

「いやぁ、いい秋空だなぁ」

久々の登校で龍也は舞い上がっていた。緊張感がなさすぎる様子に心配してしまう。これからどんなことが起こるかも知らずに…

「バカヤロー！！とっくに二学期は始まってるわい。いままで何してたんかな～！？」

只今、九月後半にさしかかるあたり。衣更えの季節である。文化祭を来週に控え準備に忙しい盛りである。

「えっと…ですねぇ…先生聞いて欲しいんですが……」

そう、サボりだ。しかも猫ちゃんが可愛くて学校を忘れていました。家でがっつり猫ちゃんと遊んでやがりました。

「夏休み初日にですねぇ…家族で旅行に行ったんですがねぇ、父親が無計画なもんでサバイバルになっちゃいまして傷を癒してましてぇ…。あー、なんですかその『うそくせ～』って目は？本当ですよ、家族揃ってダウンしてましたから」

本当っぽいことを言っているが、あえてもう一度。
猫ちゃんと遊んでいて忘れてました。修行で負った傷など超人的な身体と竜の技で一日寝てれば治りましたよ。

「ほ～、一家全員ダウンね～。零奈さんは家族でないのかい？」

ミステイク！龍也は零奈が出掛けても修行だと思ってたらしいな、様子を見ると。馬鹿なやつ。毎日制服で同じ時間に出掛けてりゃ、わかるだろ。

「まぁ、いい。なんたってもうすぐお祭りだからな！」

いいの？

あっ、龍也さんいま『ニヤッ』ってした！？

確信犯だな。

絶対に担任の先生の性格を利用してずる休みしてたな。

この学校祭というどうしても盛り上がらずにはいられない時期に追及するのもめんどくさい言い訳をされたら誰だってどうでもよくなるわなー。

「しゃー！、やるでー！今年のクラス賞はうちらがいただくでー！」

「……先生、へんな関西弁になってます……」

この学校の学校祭は中等部と高等部が併設されているのを売りにして、中等部、高等部の同じクラス（中等部の一年一組と高等部の一年一組）といったように2クラスが合同で一つのお店を出す。

学校祭は三日間続き来場者の投票を最終日に発表しクラス賞が決まる。

とりあえず龍也は教室へ向かう。教室には必要最低限の机と椅子しかなく、みんな床に腰をおろしていた。

みんなと少し話していると先生が入ってくると

「それじゃ、時間もないしテキパキいこうか！
おーい、入っておいで」

ドアを開け高等部の生徒が入ってくるが…

「こちらが今年一緒にお店をやる高等部のみんなだ。迷惑かけんなよー」

「それじゃ、お世話になります」

そういって、先生は教室を出て行った。基本先生は口出し無用。生徒でなんとかしろがモットーなこの学校祭。
高等部の生徒の責任感を養うとかいいつつ先生達は学校祭が終わるまでの二週間、登校はするがほとんど完全オフだ。

「それでは、今日は午前中にお店の内容を決め、午後から作業に移ります。先生も言ったように時間がないので協力してやりましょう」

段取りよく話を進めていく高等部の学級委員長。
だが、たくさんの生徒に埋もれて見えなかったが奥には、よく知っている人物が……

「……あ、姉貴」

小柄な身長のせいで見えなかったが確かに零奈だ。
そして当の本人は驚いた様子もなくなぜか満面の笑顔。
たぶん新学期が始まる前にはすでにわかってたんだろうな。

「零奈〜、やけに楽しそうじゃない？」
「だって、やっとの学校祭だよ。一年前から楽しみにしてたんだもん」

……。

「ルンルンルン！あっ、ほらりゅうくん間違ってるよ〜」

あからさまな鼻唄を歌いながらやたらと龍也の近くにいたがる零奈。皆が見惚れてしまう容姿は龍也のためだ。すらっとしたしなやかで艶のある身体と小さくはない胸に整っている顔、護ってあげたくなる存在は皆の視線を集める。そんな美少女が熱い眼差しを送る龍也君にも。
よく地球上の半分（男を指す）を敵にまわすとか言うが、この場合中身まで超いい人な零奈さんを射止めるとゆうことは地球上全てを敵にまわすことになるようだ。
そんな『頑張れ！』って応援したくなっちゃう龍也は皆の視線に気づき実はもっと一緒に居たい存在の零奈から離れるために買いだしの役をかってでる。

「あっ、ほんと？助かるわ！でも一人じゃ大変だと思うから…誰かひまな人は…？」

零奈が凄い眼で委員長を見ているがさすが委員長。その視線をするりとかわす。

「じゃあ、監督の意味も込めて高校生から……」

薔薇の棘（前書き）

間を空けてしまって本当にすみません。
これからも頑張って執筆を続けていきたいと思っているので温かい目で見守っていただければありがたいです。

薔薇の棘

「すいません。付き合ってもらっちゃって」
「いいのよ。細かい作業ばかりで少し動きたかったから」
付き添いの高校生は深雪さん。クラスのなかではしっかりしていて、この文化祭でも中学生達の面倒をよく見てくれているお姉さんだ。
「そう言えば龍也君、零奈ちゃんから離れるために教室を飛び出したけど何を買うかわかってないでしょ」
「えっ！…あぁ、聞いてなかったです…」
はぁ、と深いため息を龍也がつくのを聞いてから、深雪は笑顔をつくる。
「大丈夫よ。ちゃんと聞いてきたから。さぁ、行こう？」
魅力的な笑顔を崩さずに歩き始める深雪をみて、龍也も一緒に歩き出す。
買うものを一緒に探す二人は龍也がカートを押して深雪が小さなメモを見ながら目的のものを積んでいく。教室での作業よりも楽しそうな二人はたわいもない話をしながら買い物を終わしていく。
会計も終え重いものが入った袋を龍也が持ち、二つ持たせるのは悪いからともうひとつを深雪が持つ。
休憩するためにお店の外のベンチに腰を下ろし、一日頑張ったご褒美らしいジュースを深雪が差し出し、赤くなりながら隣に座る。

「ふぅ、つかれたわね」
「結構な量でしたからね」
作業をしながらのときはすらすら話せていたのに隣合わせに座りながらだとその雰囲気のせいで緊張してしまう。
「零奈さんは家ではあんな感じなの？」
「あそこまでじゃないですけどね」
「ふぅーん」
会話が続かない。
龍也は体をほんのちょっとだけ後ろに傾け顔は動かさずに横目で深雪の様子をうかがう。
疲れていると言うより悩んでいるとゆう感じの表情だ。
しかし深雪は何かを決めたように目を閉じ静かに深呼吸をしたあと目を開け、いつもの魅力的な笑顔を作り立ち上がった。
「みんな待ってるだろうから帰ろう」

「遅いよー、何してたの？」
クラスに戻るとみんなからの大ブーイングが待っていた。
サボるために買いだしに名乗り出たんだろー、深雪さんと行けるなら俺が行ったのにー、とか。
そしてあの人は……
教室の窓際でねこちゃん達とさびしそうに座っていた。

「委員長さん、零奈さんどうしたんですか？」
「さぁ？聞いてみれば？」
仕方なく零奈のほうに寄って行く。
「ど、どうしたの？」
零奈は悲しそうな顔をあげ、龍也、深雪と視線を向け一段と悲しそうな顔になりながらプイッとそっぽを向いてしまう。
しかたがないので、しゃがみこんでもう一度聞く。
「どうしたの？」
相変わらず悲しそうな顔をあげた零奈は、
「浮気者ーーーーーー！！！！！」
叫んだ。
「深雪ちゃんもりゅうくんも行く前と雰囲気違ってるもん！！ねっ」
「にゃ！」
泣きながら叫び、教室を飛び出し学校に連れて来ていたらしいねこちゃん達とどこかへ走り去ってしまった。
「はぁ～、昔から龍也君の事になると……」
委員長が面倒そうに呟くが、

「深雪さん、龍也君。探して連れ戻しなさい。急いで！」

さすが委員長。

クラス中からの『零奈さんを泣かしたな』オーラが身に染みながら二人で探しに教室をでていく。

「出てきたはいいけど…どこを探せばいいものか？」

「龍也君こっちに行きましょう」

「ぐすっ。りゅうくんのバカッ！深雪なんてっ、深雪なんて……。

……確かに深雪は可愛いけど……

りゅうくん…」

零奈が泣いているのは二階の教室とは違う階にある四階の工作室。技術の授業でしか使われない人が一番こない教室だ。

しかも、実際にいるのは隣の準備室。カッターややすり、その他の工具がしまってある部屋だ。

フーーッ！！

「ねこちゃん？どうしたの？」

ねこちゃん達が小さな窓の端に前足をのせ、外を睨んでいる。

零奈も窓から外を見下ろしてみるとそこには龍也がいた。

「りゅうくん！」

自分を探しに来たんだとわかると満面の笑顔を浮かべ窓を開けて飛

び出そうとするが、あまり使われていないらしく窓は開かない。
龍也は分厚い窓に阻まれ零奈の声が聞こえずあたりをキョロキョロ見回している。
なんとか開けようとする零奈だが全く開く気配さえない窓を壊して外にいこうとしたとき龍也が一人でないことに気がついた。

「龍也君、…あのね…」
「??」

深雪の言葉を待つが何を話そうとしているかが全くわからないとゆう顔の龍也。
そんな龍也を上目でちらっと確認した深雪は意を決したように話し始めた。

「あのね…。私ね、今までね、好きになった人っていないのね。でね、一生ねそんな人できないと思ってたの…。でもね、零奈さんが龍也君にくっついてるとき……いぃなぁ、って思ったの。」

ひとつひとつ言葉を選んで丁寧におもいを伝えていく。

「龍也君を思うと胸が苦しいの。だから今日、おもいを伝えるね。
……あなたが好きです」

「……」
「……」

静かな時間が流れる。秋らしい温かな日光に涼しい気持ちの良い風が吹く。
眩しい緑から優しい赤や黄に変わりはじめた葉っぱの音よりも自身の心臓の音が大きく聞こえ始めたとき

「深雪さんの気持ちは嬉しいんだけど、そこまでには今は思えない。やっぱり姉さんが一番大切だから。……ごめん」

瞳に涙がたまり世界が滲んでいく。

何かが耳に入ってくるが関係なく、涙を見せまいと駆け出してしまう。

龍也は追えなかった。理由はいくつかある。そしてそれらは龍也の精神を著しく乱した。

シュッ！

どこからか飛んできた普通の定規。それは正確に龍也の足首を傷つけ赤い血が付いている。

そんな傷に気づかないのか無視しているのか、空を仰いだまま動かないでいる。

そんな龍也に痺れをきらし校舎の陰から一人の男子生徒がでてきた。

「いつまでそうしているつもりだ？

君に怨みはないが運命だと思って倒させてもらうよ」

よく晴れた空がいつの間にか曇り空になり雨が降り出してきた。

そんな雨がつらくなったのか、今度は少し俯いた後その男子生徒を見つけ悲しさが浮かんだ顔で男子生徒へ向け走り出そうとする。

ヒューン、トスッ

走り出そうとした龍也の前に軽やかな音をたてながら着地した零奈がたっていた。

「りゅうくん、ダメッ！
そんな状態じゃ力を抑えきれないでしょ」
「姉さん…」
「ここは私がやるから雨の当たらないところで座って休んでなさい」
コクッと頷いただけで何も言わず校舎の端に座って膝を抱えてしまう。
そんな龍也を心配そうに見つめため息をはいた零奈は男子生徒へ向き直った。

「ごめんね。相手がりゅうくんじゃなくて」
「できれば好きな人は殴りたくないんだけどね」
「あらっ、ごめんなさい。りゅうくんよりいい人はいないからねぇ、私より強い人は」
「じゃあ、あなたに勝てば僕を認めてくれるんですね？
そっちの方が龍也君を倒すより楽そうだ」
「……むりよ」
「どうでしょうか？」

それ以上言葉を発せず二人は間合いまで歩み寄る。そしてお互いの拳が届く距離まで近寄った。

「僕のリーチの方が長いですからこのぐらいでいいでしょう？
どうぞレディーファーストで」

「……言っとくけど、りゅうくんに血を出させた罪は大きいんだからね」

そう言うと、零奈は常人には見えない速さの右の張り手を見舞う。構えも踏み込みも無しに打ったはずの一撃はバッチィーン！と小気味よい音をたて、正確に男子生徒の左頬を叩いた。

音程のダメージがないにしろ見事な一撃を喰らった男子生徒は少しの間呆然とするも、自分の女性を見る目は間違っていなかったとばかりにわずかに微笑み反撃にでる。

拳を握った右腕をゆっくりと真上に上げそこから一気に振り下ろした。

零奈は両手でそれを受け止めるが重過ぎる攻撃で地面に足がめり込む。

しかし攻撃は一発で終わらず二発目の左拳が間髪入れずに振り下ろされた。

何発もの攻撃が続き腕力で劣る零奈は必死で受けつづけた結果足は地面に刺さり両手は痺れて動かせなくなってしまった。

「零奈さん、降参しますか？」

「い・や・だ！」

「しょうがないです。僕の実力として能力を見せましょう。零奈さんも能力者だから気絶はしても死にはしないでしょう。僕の能力は蹴体術です。足技を中心とした攻撃に特化したものです」

自分の能力を少しだけ説明すると背を向け少し距離をとった男子生徒。

一息大きく吐き出し、今までとは明らかに違う雰囲気を身に纏う。

おそらくこれが彼の戦闘状態なのだろう。

そして男子生徒は強化された足で一直線に突っ込んでいった。凄まじい速さで零奈の目の前にたどり着き、そのままの速さで頭を下に

潜らせ胸を中心に前方に一回転し踵落(かかと)としを見舞う。
わずかな距離で一回転出来る回転力は恐ろしく速く強いもので、必殺と呼ぶほどのものだ。
落とされた踵は零奈の脳天を直撃した。

「ふぅ、やっと両手の痺れがとれてきたよ」

踵落としは確かに当たったはずだ。しかし零奈は平然としている。
両手を下に向けるとフワッとはまったはずの足を抜く。
そして当たったはずの蹴りをものともせず、地面に刺さったはずの足を地面にも触れずジャンプするように抜け出てしまった事。この異常な出来事にも動揺せず男子生徒は頭を働かせていた。
零奈の能力は何なのか？と。

「まだまだ、能力者の戦いはここからだよ」

余裕な零奈は再び距離をとっている男子生徒目掛けてまたも足を動かさずに飛び出していく。
しかし今度は男子生徒の目がしっかりと見ていた。飛び出す瞬間、一瞬だけわずかに零奈の足元が赤く光るのを。
手掛かりを考察する前に零奈が迫ってきていて、迎撃は間に合わず防御を選択した。
右足の上段、左手のボディー、左足の踵落とし、右足の前蹴りとかわし防ぐうちに何となく零奈の能力がわかってきたようだ。

『おそらく僕のような運動能力の底上げ。そしてたぶん足のみ。なら』

そう考えている男子生徒は次の一撃で仮定を確証に変えようとした。
零奈の右と左の手をわざわざ上に跳ね上げるように防御し、無防備

な胴に先ほど見せた前への縦回転からの前蹴りを放つ。
手での防御が出来ず、かわす事が出来ない体幹への攻撃、喰らわないためには運動能力の上がっている足のみなはず。

ドフッ！

鈍い音は足と足がぶつかる音だった。男子生徒の思惑通り、足で防御した事で男子生徒が勢いづいた。
強化された足で速さ重視の攻撃。体術なら自信があるのだろう。同じ系統の能力なら負けるはずがないと思っているからこそ攻撃にでていた。
一つでも捌ききれなかったら致命傷になる両者。そして自分の能力に自信を持っている男子生徒。
勝負はすぐつくと思われ　た。
しかし意外な結果で勝負はついた。

男子生徒の勢いが増しはじめてから足だけで手足の攻撃を防いでいたが間に合わず、鳩尾に改心の一撃が入ったと思われたが、

！！！

零奈は崩れ落ちもせず真っ直ぐ立っている。
そして何より、男子生徒は足で前蹴りを入れたはずだが感触が感じられなかった。
一撃目の渾身の踵落としも感触は感じなかったが、それは絶妙な足のクッションで柔らかく止めたと思っていたが違うようだ。

「…っ！！な、なんでだ！？」
「どうしてでしょーか？
ひとつめ、君は私の能力を勘違いしている。まさか私の能力が身体

能力の強化、足限定、とか思ってないよね！？」
「違うのか！？だって君は……」
「ふたつめ、私と君とでは実力に大きく差がある」
男子生徒の言葉を遮るようにして零奈は続ける。
「でも、私も能力を使っちゃったからなー。まだまだ！」
「一体どんな能力を？」
「そんなの教えられるわけないでしょ。じゃあ、風邪ひいちゃうからもう終わりにしよう」
息を整え構える。
そして…
ドスッ！
腰を落とし、お手本のような正拳突き。防御する隙さえ与えない拳は派手さはないが、貫通するかのような鋭く重い。
「じゃっ、風邪ひかないでね！」
そう残し、今だに俯いたままの龍也のもとへ歩いていく。
「教室もどろ」
ハンカチを渡して龍也の手を引く。
龍也は立ち上がらず呟く。
「…深雪さん……泣いてた……」

深雪が隠そうとしていた涙は隠しきれるほどの量ではなく、それ龍也は見てしまったらしい。

「そりゃあ、泣くわよ。大好きな人にふられたんだもの」

龍也の前にしゃがみゆっくり話す。

「でもね、りゅうくんは本当の気持ちを言ったんでしょう？それでいいじゃない。
あそこで嘘ついたら深雪はもっと傷ついたわよ。それにたぶん嘘だってわかるしね。」

女の子はわかるのよ、と満面の微笑みをつくる。

「それに深雪はりゅうくんが思っているほど弱くないよ。だから笑顔で教室もどろ」

大好きな姉からの優しい言葉が、思わぬ人の思わぬ涙を見たことで深く沈んでいた体を引っ張り上げていく。
そしてもう一度差し出された手をしっかり握り教室へと歩きだした。

ガラッ！

「龍也君！濡れてるじゃない！風邪ひいてない？」

教室にはすでに戻ってみんなと作業を進める深雪の姿があった。
最後に見せた涙とは真逆の満面の笑顔で龍也を迎えるその様子に龍也は戸惑っているようだ。

「龍也君、零奈ちゃんがまだ一番大切なんでしょ？
でも、愛するのは他のだれかから探すけどまだいないんでしょ？
じゃあ、私に振り向いてもらえるように頑張るね！」

教室で出た、みんなの憧れからの一言に皆が固まる。

「じゃ、こっちで一緒に作業しよう」

そう言って手をとり積極的にアピールしていく深雪だが、

「こらっー！！りゅうくんに手を出すなー！！」

後の祭

『いらっしゃいませ～』
『わたあめいかがですかー？』
『午後の部の映画は2時からとなってまーす』

ワイワイ、ガヤガヤ
文化祭最終日

龍也は一人で学校を回っていた。
おととい、昨日と零奈、深雪に一日ずつ付き合わされゆっくり見て回れていなかったので高校生の学級委員長の粋なはからいで二人と被らないように休憩をずらしてくれた。

「とは言え、皆は深雪さんや姉さんを誘いたいがために俺とは休憩をずらしちゃったんだよな」

一人で回るのはさびしすぎるので誰でもいいから知っている人はいないかと辺りをキョロキョロしながら特に人を見ながら回っていると、

「今日は一人で回られるのですか？」

耳元で龍也にだけ聞こえるようにボソッと心地いい低音が発っせられた。
背筋が凍るような感覚にバッと振り返るとそこにはしばらく顔を見せなかった死神、ドールの姿があった。

「後ろに立つな！
そして今まで何してた、母さんも姉さんも心配してたぞ」
「失礼しました。何と言われても私にも仕事がありますので」
「仕事？死神としてのか？
んっ？なんで白衣を着ている？」
「だから言いましたように仕事です。保健医です」
「…いつから？」
「今学期からです。人体には少しばかり詳しいので」
もう何事にも動揺すまいと思っていたため叫ばずにすんだが頭は抱える。

「悩みは人間には必要なストレスですが、過ぎる事は何事も毒ですよ。
さっ、ストレスの後はリラックスといきましょうか。そのようすですと誰とも予定はなさそうですから」

「で、どこへ行くんだ」
「おや、随分ご機嫌ななめですね。
まぁ、どうでもいいですけど」
「一応、お前の契約主だぞ！」
「えーと、今日は三年生の階を…」
「流すな！！」
ほぼ対等な契約をしているので少しの無礼、不躾は許容範囲内である。
そんな何気ない会話をドールはどことなく嬉しそうにしている。

「やけに計画的だな。文化祭を楽しみ尽くす気か」

昨日、一昨日で一年生と二年生の階は全て回ったらしいドールの話を聞いて龍也はドールにもそんな子供みたいな一面が有ることに驚いた。

「いいえ、実は文化祭の審査員になってしまって全部回らなくてはいけないのですよ。

まぁでも、楽しいことは好きだからいいですけど」

「そうか、ならさっさといくぞ」

ドールがこっちの世界にうまくなじんでいることを龍也は温かい目で見ている。

死神が人体に詳しく、人間の体を治すなんて冗談にもならないなぁなんて考えているが直すという字を当てれば別におかしくはないかなと納得している彼は少しずつ人とは外れてきてるかもしれない。

ドールが龍也の前に現れて、自分を評価してもらい契約を交わし交わされ修行を一緒に手伝ってもらったり多くの時間を共にした。そしていやおうなくドールの強さを感じさせられたが、時折ドールが手ごたえのなさからか退屈のようなものを感じているのは知っていた。そして龍也が家族でいるときにすんなり入ってこれていないことも。

龍也の推測ではドールは向こうでも強すぎて相手になる人がいなかったのだろう。いくら龍也の潜在能力は底がしれないとはいったものドールの相手になるのははるか先のことだろう。そしてコミュニケーション能力が低いのは天界の中でも存在するはずのない死神としてのコンプレックスからのものと群れる必要のなさからだろう。

そんな龍也の心配をよそにドールは最初の教室のたこ焼きをおいしそうにほおばっている。

「どうしたんですか？また悩み事ですか？」
「なんでもねえよ。俺の分も残しとけよ」
「はいはい、わかってますよ」

その後ひとつずつ教室を回っていくがやたらドールに話しかける人が多い。それも女子生徒が。
長身に整った顔立ちそして黒のスーツに刺し色のネクタイを合わせるファッションセンス、頭の良さを表すかのような白衣、夢を一度は見たことのある女子生徒なら惹かれずにはいられない存在だろう。

「人気者だな」
「そうでしょうか？休み時間にしょちゅう保健室に遊びに来てくれる人はたくさんいますけどね」
「・・・絶対に分かって言ってるだろ」
「さて？天使の中で育った私にはそんなに魅力的ではないですが昔の禁断的な甘美な食料の代表は若い魂ですから本能的に感じてしまう部分はありますよ」
「・・・ミスったかな？お前との契約ではお前の本能まで止められるものではないしな。一般人は殺すなよ、としかいえないんだよな」
「おや、そんなのでいいんですか？じゃあ、あとで少しだけ吸ってみましょうかね」
「どうしたもんか」

「これで全部ですね。やっと終わりました」
「あー、やっと終わりか。さすがに全部のクラスはきつかったなぁ」
全部のクラスを回り終え二人はドールの仕事場である保健室へ向かい廊下を歩いているところである。保健室は特別棟の一階グラウン

ドに面している一番南側にある。教室は渡り廊下を歩いた北棟にある。各クラスの出し物は各教室つまり北棟で行われている。校長、先生、生徒は北棟で文化祭で楽しんでいる。
南棟には人は職員室に防犯のために留守番をしている一人だけしかいない。しかし、職員室は二階である。つまり、南棟一階にはたったの四人だけ。ひとりは龍也、ふたりめはドール、そして残りの二人は・・・

「早く出て来いよ。近くには誰もいないって」

見えない誰かへの言葉も反応がなくむなしく保健室に響き応えてくる気配はない。

「出てこない・・・か。この距離で気配に気づかれるようじゃたいしたことないんだろ」

そういった途端、デスクの椅子に座る龍也とその横で直立不動で斜め裏に立っているドールの前には二人のお面をかぶった二人の若い男性が出てきた。

「へぇ、そのお面。天狗の一族か」

後の祭り開始

そこにいたのは深緑色の甚平のような物を着た二人。一般人の考える天狗とは違う服装だが、足が一本の高下駄を履き鼻の高いお面。お面は赤くなく真っ黒である。高下駄のため身長は分かりにくいがおそらく二人とも１６０ｃｍ前後であまり高くないだろう。

「ドール、何で天狗なのに赤いお面じゃないんだ？」
「あれは烏天狗の証です。いわゆる末端ですね。烏のようにいたるところに広がり主人の命令をこなしていきます」
「ふーん、じゃあ情報収集か何かかな？」
「おそらく」

そういって二人のほうへ向き直ると、品定めでもするかのように龍也とドールを下から上まで嘗め回すように観察していく。
そしてあらかた外見からの情報を纏め終えると口を開く。

「数日前、お前の女の戦いを見せてもらった。バカな男は分からなかったようだが我々は理解した。あの女の能力を。
これがどうゆうことかわかるか？我々はいつでもあの女を自由にできるということだ。いつも気にかけておくんだな。
出来るなら始末せよとの命令なのでな。これからはすきあらば・・・」
「おバカちゃんか、おまえ。それで脅してるつもりかよ？いかにも真っ先にやられるような脇役のセリフ言っちゃって。」

お面の奥の目が僅かに動き激昂したようすが窺い知れるが、おくびにも出さず主人の命令をこなしていく。

「これは宣戦布告だ」

そう静かに言うとどこかへ消えていく。
しかし、龍也達を張っていたときよりも雑であり消えた方向はまるわかりである。

「だから下っ端なんだよ」

そうゆうとドールへ視線を向け、考え込むために口をつぐんだ。
視線を受け考え込む主を確認したドールは次の行動を指示されるまで動かないかわりに、口をだす。

「彼らの目の動き、心臓の脈拍、筋肉の弛緩具合から推測します。零奈様の能力分析には自信があるようです。が肝心なところはわかっていない様子ですね。まちょっとしたハッタリでしょう。零奈様自身、観られている自覚のもと出来るだけ能力を隠しながら一部だけを使用していましたので彼らの分析のほとんどが間違っているでしょう。
そして次に仕掛けて来る内容、時期についてですが……後はご自分でお願いします」
「素直にわかりませんと言えよ」

シリアスな展開に水を差されすっかり集中力を切らしたようだ。

「何事も経験ですよ。ここで死んだらそれまでの器と言う事ですよ」

何と言うか、本当に主従の契約を結んでいるのか不思議でしょうがない。

「ふー、まぁいい。

これから姉さんについとけ。以上」

いかにも不機嫌な声で指示を終えるとドールは小さい子供のわがままを聞く親のように小さく笑う。
そして廊下へと歩きドアに手を掛けた瞬間、どこぞの下っ端とは違い音も気配も消していなくなる。
窓には零奈に手を出すと予告した相手への怒りを込めたメッセージを深紅の字で走り書きしてあった。

『I'm the god of death. I achieve the nightmare that is harder than the death』（私は死神だ。死よりもつらい悪夢を見せてあげよう）

笑えない冗談だな。顔を引き攣りながら保健室をあとにする龍也だった。

龍也は教室にまっすぐ向かったが教室にはすでに零奈の姿はなく、「しまった挑発しすぎたか」とか思いながらあの姉が争った跡もなく連れ去らわれるはずがないとはわかっていても内心でハラハラしながら頭の中の情報を整理していく。
（あいつらは異様に苛立っていたからまだ捕まってはいなかったはずだ。つかまっていたならもっと余裕な表情を見せているはずだ。飛んでった方向は体育館の方向か、教室の作業はいまは一時止まっている？何かを待っている？誰も何も言わないし教室の近くでつかまったわけではなさそうだ。）

「委員長。零奈さんの姿が見えないのですがどこかへ買い出しにでも行ったのですか？」
「零奈？零奈は・・・何人かと体育館へ備品の長机を何人かと取り

に行ったよ。」

クラスの全員の行動を書いている紙を確認しながら龍也に告げる。
（逆か、クソ野郎。教室に向かったやつらはおとりか。）
廊下を走り出し階段方向へ曲がり誰からも見えなくなると右足で強烈に踏み込み階段の窓をたたき割りダイブ。体育館へと急ぐ。
体育館は教室から真逆な位置にあり教室は４階、体育館は２階なしの建物。廊下には踏み込んだ足跡がくっきり残っている。
修行で身に着けた技のおかげでこれくらいの障害はへでもない。
備品を取りに行ったのなら体育館の倉庫側に行くはずだが、すでに出し物が終わっているはずのフロアの暗幕がいまだに閉まっているのは不自然すぎて疑う余地もない。
ドアは正面以外閉まっており学校の施設を壊すにもいかないので仕方がなく正面から堂々と入っていく。そこに待っているのは探していた零奈がロープに縛られて座っている。その隣には先ほど宣戦布告をしに来た二人。ステージには見たことのない制服姿の少年。

「ようこそ、龍也君。待っていたよ。」
「姉さん、何の真似でしょうか？」

あっさり少年の言葉はスルーされなぜかつかまっている様子の零奈に龍也は問いかけた。若干とげがある話し方はこの状況を作り出している変な奴らとそれを利用しているだろうと思われる零奈にも向いているからだろう。

「りゅうくん！たすけて！」
「演技しても無駄ですよ。自分でやっといて・・・自分で抜け出せるでしょう。こんな奴ら。」
「ぶー、助けてよー。こんな状況にあこがれる年頃なんだよー。助けないとみんなに深雪に告られてたこと言っちゃうぞ。」

「だめだそれは。今助けるからじっとしてて。」

すぐさま答える龍也。深雪の件をみんなに知られたら今後学校内に龍也の味方は皆無になってしまうことが容易に想像でき残された選択肢を取るしかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2636h/

たつがみ

2010年11月3日17時33分発行